

第 19 回 農業高等学校生意見文全国コンクール審査講評

審査委員長 上地 由朗

農業高等学校生意見文コンクールは、農業や農業関連産業の後継者・従事者として、また、農業指導者や農業に対するよき理解者として、これからの日本農業を持続、発展させる担い手となる高校生が農業および農業を取り巻く様々な環境に対する思いを意見文にまとめることにより、農業に対する意識を高め、高等学校での生活や学習を一層充実させることを期待するためのものです。日本農業教育学会主催の取り組みとしてさらに充実させ、大きく飛躍させたいと考えています。

今年度で 19 回目を迎えました本コンクールには、全国の日本学校農業クラブ (FFJ) に加盟している農業高校および農業関連学科に所属する FFJ 会員の高校生から 35 件の応募がありました。応募された意見文は、それぞれの農業体験や実習、実践活動、研究開発などを通して、農や食への興味・関心、地域貢献や自分たちの暮らしなどへの取り組み、将来の夢などについて、高校生らしく自分の気持ちを素直に表現した素晴らしい作品でした。また、自らが積極的に考え、行動し、その成果を自分なりに工夫して取りまとめた意見文も多くみられました。これらの意見文について、課題と内容の整合性、文章の論理性、説得力、さらには農業高校生としての自覚と内容の適性、意見の妥当性や建設性、将来への熱意など、幅広い観点から厳正な審査を行なった結果、最優秀賞 1 作品、優秀賞 3 作品が決定いたしました。また、これらと同様に内容のすぐれた 2 作品に対しては審査員特別賞を設けました。

最優秀賞に選ばれました大鳥采音さんの『地域でつなぐ、受け継ぐ食文化』は、各地域で消えつつある食文化が数多くあるなかで、地元の食文化の継承のための取り組みについての意見文です。自分が生まれ育った地に根付く食文化を存続させようとする強い気持ちが伝わってくる非常にすぐれた作品でした。

また、優秀賞に選出された荒鹿正也さんの『高校生活を通じて明確になった将来の夢～地域の農地を守る農業経営者になる～』は、自らの農業体験を通して、将来の農業経営と先進技術に興味・関心を持ち、水稲と野菜の複合経営に乗り出そうとする熱意にあふれた作品でした。地下水制御システムを導入した成果が今から楽しみです。福村志保美さんの『地域農業の救い手になりたい～情報発信から始める少人数で行える農業の在り方～』は、これからの農業では情報発信が重要であることを強く訴える作品で、農＝3K のイメージを変えていこうという姿勢が新鮮に感じられました。平畑太陽さんの『つまらない農業？ 農、楽しい農業』は、将来自らの力で農業経営を行うことを念頭において、具体的で綿密な経営戦略を示した作品で、将来は大好きな農業とともに生きようとする姿勢は高く評価できます。

審査員特別賞では眞島康静さんが『定時制農業高校の給食を通して私たちが考えた食品ロス問題』のなかで、アルバイトを通じて食品ロスという問題に気づき、それを身近なところから自分の力で解決していこうという活動が描かれています。また、石井りせさんの『ブルーベリーに未来を託す』は、ブルーベリーを生かした地域おこしの可能性が書かれたもので、いろいろな活動を通じての頑張り、商品開発にかかわる熱意が感じられました。いずれもそれぞれの取り組みへの強い意欲にあわれた興味ある作品でした。

今回応募された意見文には、共同研究の内容でありながら、役割分担や寄与度が不明瞭であったり、共同研究者に対する謝辞が述べられていなかったり、指導教員の考えが入りすぎていると思われる作品もありましたが、応募された意見文はすべて審査の対象にいたしました。これからも今までと同様に、「自らが考え、行動し、取りまとめる」という本コンクールの原点に立ち、厳正に審査を行なってまいります。

最後に、本コンクールの推進にあたり、ご協力をいただきました皆様に心より深く御礼申し上げます。